

2017年度 中央大学共同研究費 一研究報告書一

研究代表者	所属機関	法学部		2017年度助成額
	氏名	一政(野村) 史織		2,400(千円)
	NAME	Shiori Nomura-Ichimasa		
研究 課題名	和文 19世紀から20世紀北米における移民をめぐる規制と移民 コミュニティの変容 英文 Restrictive Immigration laws and the transformation of immigrant communities in the U.S.A. and Canada, in the 19 th and 20 th centuries	研究 期間	2017年度 ～2019年度	

1. 研究組織

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	一政 史織	中央大学・法学部・准教授	研究統括、理論(社会学、文化研究)、移民をめぐる米国の世論や社会運動、移民たちのトランスナショナルなメディア活動や社会運動	研究代表者
2	小田 悠生	中央大学・商学部・准教授	米国の移民政策、政府関係資料、NGO組織の資料の収集、分析、人権概念の変容の検証	研究分担者
3	和泉 真澄	同志社大学・グローバル地域学部・教授	米国、カナダの日系人史、社会・文化史、新たな史料の発掘、聞き取り調査、移民の主体的な経験や語りの収集と分析	研究分担者
4				
10				
11				
12				
合計		3名		

2. 2017年度の研究活動報告

(和文)

I. 本研究の目的と今年度の研究目的の概要

本研究の目的は、国家および国民の概念を考察し、移民たちの具体的な生活や帰属意識に着目することで、十九世紀後半から現代に至るまでの北米での移民をめぐる規制やコミュニティの変容、その背後にある政治、経済、文化、歴史を再検討することである。本共同研究は、特定の移民集団、国民国家などの枠組みにとらわれずに、三名の研究者が扱う様々な事例研究や理論研究を統合することで、アメリカ合衆国、カナダの移民たちの歴史を多角的に読み解こうとしている。以上の研究目的のために、本年度の研究では、学際的で多様な視点から批判的に理論構築を行なうこと、また、広範な史資料の批判的かつ精緻な分析から移民たちの主体的な経験や記憶を掘り起こし、実証的かつ多元的な歴史を叙述しようと試みた。

II. 各自の研究の進展と共同研究への寄与

以下、共同研究全体に寄与する形で、各自の研究がどのように進められたのかを記す。

①まず、一政（研究代表者）は、移民研究の動向をまとめ、特に、近年議論の高まりを見せている移民たちの「トランスナショナリズム」を、個別事例研究から精査する役割を負っている。具体的には、十九世紀終わりから二十世紀はじめの移民をめぐるアメリカ合衆国の社会運動と、それに関連する移民たちのトランスナショナルなメディア活動や社会運動に注目することで、トランスナショナリズムを検討しようとしている。2017年度は、アメリカ合衆国の移民史や移民をめぐる理論を中心に、現在までの移民研究の動向について概観し、近年の移民研究で提示されてきたトランスナショナリズム理論を精査する予定であった。しかし、実際には、その作業と並行して、2018年度以降の研究計画にあった事例研究を前倒しで進めていくこととなった。

本年は、まず、移民との関わりも深く、また、その運動家たちが移民をめぐる社会学理論構築や世論形成に深くかかわった社会改革運動であるセツルメント運動に注目した。全米セツルメント連盟に関する1899年から1958年までの議事録、報告書等の活動資料等のマイクロフィルムを予算の範囲内でできるだけ収集、データ化し、アメリカのセツルメント運動を包括的に把握しようとした。資料を分析する中で、アメリカ人女性でセツルメント活動家である人物が、東欧系移民や日系移民と様々な関わりを持っていることが分かり、この女性活動家について資料を集め、分析した。また、移民集団の中での若い世代も教育、社会運動などの活動を通じて組織化されていったことから、移民の子ども達に対する組織化の動きにも注目し、ケーススタディーとしてクロアチア系移民協会の青少年部の資料を分析した。これらの研究を、『アメリカ太平洋研究』、『英語英米文学』に発表した。これらの日系移民や東欧系移民などの移民をめぐる20世紀初めの社会改良運動について事例研究を通じて、トランスナショナルな移民のネットワークに関する理論をより理解することができた。

②小田（研究分担者）は、人種やエスニシティの視点から、二十世紀から現代にかけてのアメリカ合衆国の移民政策全般を精査する役割を負っている。特に、人権概念の変容に注目することで、移民政策史の再検証を試みている。この目的のために、本研究プロジェクト期間を通じて

立法府と行政府を中心とした連邦政府史料、人権団体や移民支援団体をはじめとした NGO 資料の収集を行う。2017年度は、8月25日-9月10日、テキサス大学オースティン校（アメリカ合衆国テキサス州オースティン）にて資料収集を行った。同大学は、ラテンアメリカ諸国、米国内のラティーノに関する、全米有数のコレクションである **Benson Latin American Collection** を所蔵しており、複数のラティーノ団体の史料を渉猟できたことで、20世紀におけるマイノリティ・移民の権利獲得・保護運動についての研究を進めることで、排斥と保護というせめぎ合う世論、政策が移民政策にどのように反映されたのか、また、各団体は各移民政策にどのように対応していったのか考えることができた。また、“**Mexican American Repatriation and Citizenship Cases**” について、**Organization of American Historians** 年次大会での発表準備も行うことができた。（アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント市, 2018年4月12日予定。）

③和泉（研究分担者）は、「移民の経験や語りコミュニティの変容」という視点から、日本からアメリカ・カナダへの移住者とその子孫（日系人と総称）の体験に関して、特に移民一世や帰米二世、帰加二世などを中心として、草の根の移民個々人の声を集める役割を負っている。そのため、和泉は、研究期間を通じて史料の発掘、聞き取り調査を進め、また調査結果の発表を行う。2017年度は、4月に、**Association for Asian American Studies** の年次大会で、日系アメリカ人が拘禁されたヒラリバー強制収容所の女性の活動について口頭発表を行った。8月にはカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)のアジア系アメリカ人プログラム教授の **David K. Yoo** 先生と懇談し、帰米二世井上龍生による日本語のツールレイク獄中日記の英訳を UCLA のウェブサイトに掲載するための打ち合わせを行った。10月には Yoo 先生を同志社に迎え、アジア系アメリカ研究に関する公開講演会を行った。11月上旬に、シカゴで **American Studies Association** の年次大会で、日本でアメリカ史関連の論集を作った経緯を口頭発表した。中旬にロサンゼルスより、日系三世パフォーマンス・アーティストのノブコ・ミヤモトが来日したので、公開講演会を行った。12月2日は京都女子大学において、井上獄中日記の中から、食に関連する部分を取り上げ、分析した。移民たちの聞き取り調査や、文化的実践の参与観察等の研究成果として、2018年3月に文理閣より出版された『移民が紡ぐ日本—交錯する文化のはざま』の第6章ロサンゼルスの洗心寺で継続している盆踊りの分析に関する論文を発表した。また同月には、ロサンゼルスでノブコ・ミヤモトがアジア系芸術文化活動の拠点としているパフォーマンス・アート・カンパニーであるグレートリープが結成40周年イベントを行ったため、その参与観察、調査を実施した。

III. 国内、国外での共同研究活動と今後の進展

研究開始時より、メンバー全員が、理論的な検証と実証研究を統合できるよう心掛け、共同研究を続けている。各自の研究の進展については、メール等で定期的に情報交換を行い、また、人文研「南北アメリカの歴史、社会、文化」チーム（主査 一政史織）を利用して、メンバーが定期的に集まり、テーマについて意見交換や研究打ち合わせ等を行った。また、本年は本共同研究メンバーが、アメリカ学会と OAH 共催の日米友好基金の今年度の招聘プログラムの企画等に関わり（中央大学は開催校の一つ）、本研究メンバーである同志社大学の和泉の協力を得て、

2018年5-6月に開催予定の Prof. Katherine Benton-Cohen (Georgetown University), Prof. Bethel Saler (Haverford College)による本学(法、商、文各学部での学部生向け講義、人文研公開研究会、研究交流会等)、アメリカ学会年次大会(北九州市立大学)、同志社大学、アメリカ太平洋地域研究センター(東京大学)での数回にわたる講演やシンポジウムなどを企画した。この過程で、本共同研究のメンバー同士で互いの「移民」や「アメリカ史」の講義参観計画、Katherine Benton-Cohenの近著の共訳企画、Cohenと共同研究者3名による Organization for American Historians (OAH)で2020年での共同発表に向けての打ち合わせ等を開始した。なお、歴史や文化研究という社会科学、人文学研究の性質上、ケーススタディーは様々なものとなる。そのため、共著の論文は考えにくく、また、個別のケーススタディーの比較、統合、理論精査等が本研究の意義であるので、共著の論集、共訳、グループでの学会発表(国際学会でのパネル発表、ワークショップ等)、互いの研究成果や著書の合評会を今後はさらに積極的に行えるようにしていきたい。

(英文)

The purpose of this research is to examine the concepts of nation, race and citizenship by analyzing the changing transnational socio-political, economic and cultural contexts of immigrants in the globalizing world as well as by exploring their individual life history. In particular, we look at various regulations on emigration/immigration and try to describe the impact of such restrictive immigration laws on the formation and transformation of immigrant communities in North America since the late 19th century.

We have been conducting collaborative research and making an effort to integrate theoretical and empirical research practices. This year, we regularly exchanged information by e-mail and we had some study meetings to discuss the issues. As for each member's research achievements, see the list below.

3. おもな発表論文等(予定を含む) ※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

【学術論文】《著者名、論文題目、誌名、査読の有無(査読がある場合は必ず査読有りと明記してください)、巻号、頁、発行年月》

1. 一政(野村)史織、「セツルメント運動の活動家エミリー・グリーン・ボルチと社会学ースラヴ移民像と同化における性役割分業」、『英語英米文学』(中央大学)、58巻、67-90頁、2018年2月。
(査読なし)

2. 一政 (野村) 史織、「子どもたちの組織化と越境的なネットワーク—第一次世界大戦中の米国ク
ロアチア民族協会青少年部」、『アメリカ太平洋研究』(アメリカ太平洋地域研究センター)、18 号、
81-97 頁、2018 年 3 月。(査読有り)

【学会発表】(発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月)

1. Masumi Izumi, “Women’s World’ in Japanese American Concentration Camps: Excavating
Issei Women’s Thinking from the *Gila News Courier*,” Association for Asian American Studies,
Annual Meeting, Portland, Oregon. 2017.4.13.

2. 和泉真澄「ある婦米二世によるツールレイク隔離収容所監房獄中記の分析」日本移民学会年次大
会、東洋大学、2017. 6. 25.

3. Masumi Izumi, “A Textbook of Wrath: An American History Textbook Authored by Japanese
Scholars to Counter Hate” American Studies Association, Annual Meeting, Chicago, Illinois.
2017.11.10.

4. 和泉真澄「食の観点から見るツールレイク日系人隔離収容所監房獄中記」マイグレーション研究
会、京都女子大学、2017. 12. 2.

【図 書】(著者名、出版社名、書名、刊行年)

1. 和泉真澄、(共著) 河原典史、木下昭編 (文理閣) 『移民が紡ぐ日本—交錯する文化のはざま
で』、第 6 章、「アメリカにおける盆踊りとジャパニーズネス—ロサンゼルス洗心寺に見るエス
ニック・マーカ—の多層性」、pp.78-100、2018 年 3 月。(査読有り)

【その他】(知的財産権、ニュースリリース等)

なし